

# 事例レポート

『We Can!』を活用し、画期的な英語の授業づくりを進めている学校を取材しました。どのように『We Can!』を活用しているのか、効率的に指導を行うためのポイントなどをお聞きしました。



事例1 京都市立

## 九条塔南小学校

子どもの理解度に寄り添い、「選択と集中」で授業をつくる

### 指導書の計画どおりでなくてもOK

パチン、パチン。指を鳴らす小気味よい音が教室に響く。その音に合わせて、子どもたちが元気にチャンツに取り組んでいた。“Get up, get up, what time do you get up?”——

ここは京都市立九条塔南小学校5年生の教室。この日に扱う単元は『We Can!①』のUnit 4だ。デジタル教材は使わず、英語担当の山川拓先生やまかわたくが指を鳴らし、その音でリズムをとる。教室のテレビ画面に手作りのスライドショーを流しながら、オリジナルのチャンツを披露した。

『We Can!』のデジタル教材のチャンツは、子どもにとっては難しかったり、速かったりする



山川先生が手作りのチャンツに取り組む、笑顔を見せる子どもたち。

ることもある。そこで、より単純なチャンツを作りました」と山川先生。京都市では、市独自の取り組みとして、4年生で計10時間、外国語活動に取り組んできた。しかし、『We Can!』は基本的に3~4年生で外国語活動を計70時間経験してきた児童を想定しているため、「10時間しか外国語活動を経験してきていない今年度の5年生にとっては、レベルが高い部分もある」と言う。

取材したのは、全8時間中の第6時。この日初めて、新しい言語材料であるalwaysやusuallyといった頻度を表す副詞が授業に登場した。『We Can!』指導編の「指導の流れ」では、頻度の副詞は第2~5時で扱う計画を示しているため、やや遅い展開ということになる。

「今年度の5年生に指導編どおりの計画で授業を進めたら難しく感じてしまう子どももいるでしょう」と山川先生。Unit 4の内容理解には、1~60までの数字や時刻、日課などの表現を知っていることが前提となる。しかし、今年度の5年生は『We Can!』で初めて本格的に英語に触れるため、そういった前提となる表現から慣れ親しんでおく必要があるという。

そこで、山川先生は第1~5時を使い、数字や時刻、日課などの表現の練習に充てた。1~60

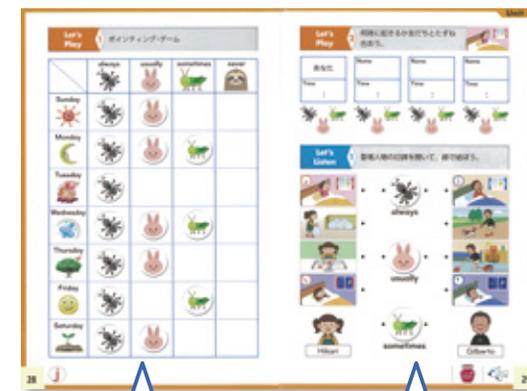
の数字が書かれた表をスライドに映して音読したり、日課を表す表現を絵カードで示しながら読み上げたりと、Unitの内容に入る前の準備にたっぷり時間をかけたのだ。

### 重要部分は繰り返す一方、省く部分も

その結果、授業時間の制約上、Unitの中で扱えない部分も出てくる。そこで、事前に『We Can!』の内容を隅々まで把握しておき、授業で重点的に扱う項目と省略する項目を選ぶのだ。山川先生の場合、そのUnitで子どもに学んでほしい目標を立ててから、『We Can!』の中で使用する部分を選び、授業を独自にデザインしていく。本時でも、p28(※1)の「Let's Play 1」のポイント・ゲームは省略。順番を変えて扱ったり、『Hi, friends!』を活用したりもする。

デジタル教材についても同様だ。山川先生は「事前に視聴しておいて、どこまで使うか、どこで止めるかを検討します。場合によっては、別の活動に置き換えることもあります。材料があるから使わないといけなれないと思いがちですが、教

※1 『We Can!①』 Unit 4 (p28-29)



「Let's Play 1」のポイント・ゲームは省略!

「Let's Listen 1」では、一人の音声だけを何度も繰り返して聞く!

材を使うのに必死になりすぎると、子どもを丁寧に見取ることが難しくなってしまいます」と語る。

本時でp29(※1)の「Let's Listen 1」で聞き取りを行う場面でも、使用したのは音源の半分のみ。しかし、その部分は何度も繰り返して聞かせ、「usuallyの部分だけ集中して聞いてみよう」と強調した。『We Can!』活用には、メリハリが重要なのだと実感した授業だった。

ここがポイント!

### 手作り教材で内容をアレンジ

『We Can!』の内容をより理解しやすくするために、山川先生がよく活用するのがオリジナルの手作り教材だ。

本時でも、自作のチャンツを披露したほか、頻度を表す四つの副詞を扱うにあたっては、横軸に曜日、縦軸に“get the newspaper”“clean my room”などの日課が書かれたオリジナルの表を用意。授業では、山川先生が自身の生活にもとづいて表に丸をつけていき、全ての曜日に丸がついた日課をalways、一つも丸がつかない日課をneverなどと紹介し、

単語の意味を推測させた。子どもたちは、alwaysについては「全部の日」、neverについては「ほとんどしない」などと次々に声を上げていた。

「意味を口で教えるのは簡単ですが、大事なのは子どもたち自身が単語のイメージを感覚で捉えること」と山川先生。考えさせることで定着率もアップするのだ。



自作の表を掲示し、単語の意味を子どもに推測させる山川先生。